



心からの「いただきます」「ごちそうさま」

校長 益子 聡

食肉加工センターの坂本さんの仕事は牛を殺してお肉にする仕事です。坂本さんは、殺される牛と目が合うたびに〈いつかこの仕事をやめよう〉と思っていました。

ある日、次の日に肉になる牛を乗せたトラックがセンターにやって来ました。しかし、いつまでたっても荷台から牛が降りてきません。坂本さんは心配になって覗いてみると、10歳くらいの女の子が、牛のお腹をさすりながら話しかけている声が聞こえてきました。

「みいちゃん、ごめんねえ。みいちゃんが肉にならんとお正月が来て。みいちゃんば売らんとみんなが暮らせんけん」。

坂本さんは〈見なきゃよかった〉と思いました。

トラックから降りてきた女の子のおじいちゃんが、坂本さんに頭を下げました。

「みいちゃんは、この子と一緒に育ちました。だけん、ずっとうちに置いとくつもりでした。ばってん、みいちゃんば売らんと、この子にお年玉も、クリスマスプレゼントも買ってやれんとです。明日はよろしく願います」。坂本さんは、また〈この仕事はやめよう〉と思い、明日の仕事を休むことにしました。

家に帰り、そのことを小学生の息子のしのぶ君に話しました。しのぶ君は〈ふーん〉と言って黙っていました。

その夜、一緒にお風呂に入ったとき、しのぶ君は坂本さんに言いました。

「やっぱりお父さんがしてやった方がよかよ。心の無か人がしたら、牛が苦しむけん」。しかし坂本さんは休むと決めていました。

翌朝、しのぶ君は学校に行く前に叫びました。

「お父さん、今日は行かなんよ!」。坂本さんは洗い顔をしながら仕事場へ出かけました。

坂本さんが牛舎に入ると、みいちゃんは他の牛がするように角を下げて威嚇するようなポーズをとりました。

「みいちゃん、ごめんよう。みいちゃんが肉にならんと、みんなが困るけん。ごめんよう」と言うと、みいちゃんは坂本さんに首をこすり付けてきました。

「みいちゃん、じっとしとけよ。動いたら急所をはずすけん、そしたら余計苦しかけん、じっとしとけよ」と坂本さんは言い聞かせました。

みいちゃんがちょっとも動かなくなったその時、みいちゃんの大きな目から涙がこぼれ落ちてきました。坂本さんは、牛が泣くのを初めて見ました。

おじいちゃんは、その肉を少しもらって帰り、家族みんなで食べましたが、女の子は食べませんでした。

「みいちゃんのおかげでみんなが暮らせるとぞ。食べてやれ。みいちゃんにありがとうと言うて食べてやらな、みいちゃんがかわいそかる? 食べてやんなっせ」。

女の子は泣きながらこう言って食べました。——「みいちゃん、いただきます。おいしかあ、おいしかあ」

(『いのちをいただく』文:内田美智子、絵:諸江和美/2009年、西日本新聞社より)

助産師として30年以上、人の命の誕生の瞬間に立ち会っている内田美智子さんは、坂本さんの話を聞いて感動し、絵本にしました。それがこの『いのちをいただく』です。北浦和小の図書室にも置かれています。

先日、全国学校給食週間(1/24~30)にあわせて行われた児童の給食委員会による発表の中で、私は〈給食のときなどに言っている「いただきます」「ごちそうさま」には次のような意味があります〉という話をしました。

- ・〈作ってくれてありがとう〉という、給食調理員さんたちへの感謝の気持ち
- ・〈育ててくれてありがとう〉という、野菜やお肉、果物を作り育ててくださる農家の人たちへの感謝の気持ち
- ・〈生き物さん、ありがとう〉という、私たちが元気に成長するために食べ物となった生き物への感謝の気持ち

そして、最後に〈これからも、私たちが健康で元気でいられる、運動ができる、遊ぶことができるのは、野菜や肉、魚などの多くの命をいただいているからということをお忘れず“三つの感謝の気持ち”をもって食事ができると、野菜や肉、魚もきっとうれしいに違いないでしょう〉と、まとめました。

前述の絵本のあとがきに、内田さんはこう書いています。

〈私たちは、奪われた命の意味も考えず、毎日、肉を食べています。自分で直接手を汚すこともなく、坂本さんのような方々の悲しみも苦しみも知らず、肉を食べています。「いただきます」も「ごちそうさま」も言わずにご飯を食べることは、私たちには許されないことです。感謝しないで食べるなんて許されないことです。食べ残すなんてもってのほかです。〉